

高齢者の旅行意識とバリアフリー旅行の可能性に関する研究

～デイサービス施設利用者へのインタビュー調査から～

東京都立保健科学大学 保健科学部 作業療法学科 4年

石橋 綾

要旨: 高齢者の旅行意識を知るために、通所介護施設の利用者 26 名にインタビュー調査を行った。その結果、“旅行に行きたいが、人的要因により行かれない者”“他人に迷惑をかけてしまうから、行ってはいけないと思っている者”が多数いることがわかった。高齢者や障害者の「旅行に行きたい」という希望を叶えることは、QOL を高め、自信を持って生き生きとした生活を送るための作業療法支援の一環と考えられる。そこで、旅行社の企画する“バリアフリー旅行”を活用し、旅行に挑戦してもらえよう、バリアフリー旅行へ 3 つの提案を行った。

Key Word: バリアフリー(旅行), 高齢者, QOL

I. はじめに

実習中、担当ケース(60 歳代・男性)に、「どのようなことができるようになりたいですか」と尋ねると「もう一度、妻と旅行に行きたい」と答えがあり、『障害を持った人の旅行』に関心を持った。旅行は、高齢者や障害者にとっても、関心が高い娯楽であり^{1) 2)}、障害を持って旅行へ行くことは特別な意味があるとされている³⁾。そこで、近年、高齢や障害によって一般のツアーに参加できない人を対象とした旅行が“バリアフリー旅行”として、売り出されるようになってきていることから^{4) 5)}、バリアフリー旅行を専門に扱う部門のある大手旅行社 2 社を訪問し、バリアフリー旅行の現状を聞き取り調査した。

その結果、昨年 1 年間に 2 社で約 130 件のバリアフリー主催旅行(ツアー旅行)が催行されていた。実際に旅行した旅行者の数は 2500 人程度で、そのうち 6 割～8 割がリピーターであった。また、ツアー参加者は 50～70 歳代が大部分を占め、特別な配慮が必要な原因は、両社とも脳血管障害の後遺症が多く、次いでリウマチ、パーキンソン病、関節疾患、ペースについていけないなどが挙げられた。A 社では、脳性麻痺、筋ジストロフィー症、脊髄損傷、ポリオ後遺症などの比較的重度の障害を持っている人も旅行の対象となっていた。参加者の内訳は B 社の場合、車いす使用者が約半数、杖使用者が数名、家族など(健常者)が半数弱であった。車いす使用者の中には、“普段は車いすを使わないが旅行を楽しめるように使う人”も数名含まれているとのことであった。障害者の単独参加は、両社とも 1 ツアーあたり数名で、『身の回りのこと(観光中の移動も含む)ができること』が条件

となっていた。B 社からは、介助が必要な人が単独参加できるよう、旅行中専属で支援を行う“トラベルサポーター”の充実を目指しているとの話が聞かれた。

旅行先は、国内は両社とも北海道から沖縄まで企画されており、A 社によると、人気コースは一般の旅行者と変わらず、定番の『紅葉の京都・奈良』や『(最近世界遺産に登録された)知床』などであった。また、歌謡ショーや観劇がセットになっているツアーも人気が高いとのことであった。一方、海外旅行は、B 社では施設事情がよく安心できるハワイやオセアニア地域と共に、石畳の多いイタリアや、階段や段差の多い地域(アジアやアフリカ)にあえて挑戦するツアーも、ツアーだから行ける旅行先として人気が高いとのことであった。なお、A 社ではハワイやオーストラリアは一般向けツアーの範囲内で車いすの対応も行っていった。両社とも、「本人が旅行に行きたいと思えば、どんな人でも、どんなところでも原則として行かれない旅行はない」としており、バリアフリー旅行の大きな可能性が示された。

“バリアフリー旅行のこれまでと今後の展望”では、『バリアフリー旅行参加者は年々増え続けており、今後、旅行者・旅行内容共にさらに多様化し発展していく』との見解を得た。一方で、新規参加者の獲得が難しく市場規模が拡大しないため、①ツアーの日程や目的地が限定される、②価格が一般向けツアーの 3～5 倍かかる、③新聞や TV を使った大規模な宣伝ができず認知度が上がらないなどのバリアフリー旅行業界の課題を知った。

旅行に行きたいと考えている高齢者や障害者は多いはずなのに、新規参加者が増えにくいという現状に疑問を持ち、その背景に旅行支援の鍵があるのではないかと考えた。そこで、バリアフリー旅行の対象者となる“何らかの援助を必要としている高齢者”にインタビュー調査を行い、1. 旅行の現状と関心、2. 旅行に行かれない理由と必要な援助、3. バリアフリー旅行の認知度と可能性について検討した。

II. 方法

1. 対象者

都内の通所介護施設(老人デイサービス)利用者(登録 100 名)のうち、個別インタビューの同意を得られた 26 名(男性 9 名、女性 17 名、平均年齢 80.5 ± 7.8 歳)であ

表1: 最近旅行に行った人

基礎情報(*1)						移動補助具(*2)	家族構成	日程	同行者	内容	頻度	バリアフリー旅行(*3)
年齢	性別	介護度	身体状況	介護度								
1	66	女	1	右片麻痺(言語・歩行障害)	無・無	夫	3泊4日～10日程度	夫	ツアー旅行(タイ、南紀、白馬、韓国、イタリア、北海道 他多数)	2ツアー/月	×	
2	84	男	1	パーキンソン病(軽度:歩行障害)	無・無	妻	2泊3日	妻・仲間	個人旅行:昔の仲間に会う(熟海)	1回/年	×	
3	88	女	1	膝が痛い、膝が曲がらない	杖・シ	息子	たいてい日帰り	息子夫婦	個人旅行:温泉、紅葉、お参り(秩父、三峰、富士山5合目)	日帰り:1回/月 宿泊:2回/年	○:冊子が届く	
4	89	女	1	腰～足が痛い、下腿常時痺れ	杖・杖	娘夫婦・孫	1泊2日が多い	2人の娘と姪	個人旅行:風呂、食事、おしゃべり(西武園ホテル、箱根、河口湖)	3回/年	×	
5	89	女	要支	右人工股関節(10年以上前に施術)	無・杖	独居	日帰り	仲間	団体旅行:自治会主催。貸切バスで日帰り温泉(川治温泉) 個人旅行:友達の家で家族の車で(野沢温泉)	個人旅行 3～4回/年	×	
6	91	女	1	膝関節痛、難聴、視力障害、糖尿病	無・杖	独居	2泊3日	息子夫婦	個人旅行:温泉(鳴子温泉)	2～3回/年	×	

*1) 平均年齢:84.5±8.54歳、女性5名、男性1名 要支=要支援(1名)、介1=介護度1(5名)、
 *2) 屋内・屋外の順に示す。無=移動補助具を使用せず 杖=杖を使用 シ=シルバーカー使用
 *3) ○=バリアフリー旅行を知っていた、×=バリアフリー旅行を知らなかった

表2: 最近旅行に行っていない人

基礎情報(*1)						行きたい旅行のイメージ(*3, 4)	旅行に行かれない原因						行かれないために必要な事		バリアフリー旅行(*5)						
年齢	性別	介護度	身体状況	移動補助具(*2, 3)	家族構成		身体的理由						人的理由			経済的					
							①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧			⑨	⑩	⑪	⑫	
1	62	男	介2	左片麻痺	無・杖	妻、娘、息子	C	1										1	×		
2	69	男	介1	パーキンソン病	無・杖	妻・娘夫婦	B					1							×		
3	71	男	介1	右片麻痺	無・杖	独居	B	1											×		
4	72	女	介1	パーキンソン病	杖・シ	息子	C			1									×		
5	72	女	介1	左片麻痺・浮腫	杖・杖	娘夫婦、孫	A:世界一周クルーズ	1	1										×		
6	74	男	介1	左片麻痺	杖・杖	妻	A:ジャマイカで息子家族に会う												×		
7	74	女	介1	右下腰痛、腰痛	無・杖	独居	C	1					1	1					○:旅行誌で見た		
8	79	男	介1	四肢痺れ(左>右)	無・無	妻・息子	C	1	1										×		
9	80	女	要支	活発に動けなし	無・無	独居	C		1	1			1						×		
10	83	女	要支	なし	無・無	親戚男性(50代)	C			1				1					○:不明		
11	83	女	要支	なし	無・無	独居	A:2泊3日で娘夫婦と伊豆の温泉					1							×		
12	83	女	介1	在宅酸素使用	無・杖	娘夫婦、孫、ひ孫	B	1			1								×		
13	83	男	介2	右片麻痺	無・杖	妻、娘夫婦	C	1											1	○:チラシが届く	
14	84	女	介1	なし	無・無	独居	B					1							×		
15	84	女	介1	膝疼痛	無・杖	夫	B	1	1					1					×		
16	85	女	介1	下肢、腰	杖・杖	独居	B	1	1										×		
17	85	男	要支	なし	無・無	独居	A:ツアーで敦煌			1										×	
18	85	女	介1	めまい	無・無	娘夫婦、孫	B				1	1								×	
19	88	男	介1	左膝疼痛、痺れ	無・杖	妻	B	1	1					1	1					○:チラシが届く ○:旅仲間聞いた	
20	90	女	要支	心臓、右下腰痛	無・無	独居	C			1					1	1				×	
合計(名)							A=4, B=8, C=8	10	6	5	2	5	2	3	6	7	3	3	1	4	知っている:5

*1) 平均年齢:79.3±7.8歳 女性12名、男性8名 要支=要支援(5名)、介1=介護度1(13名)、介2=介護度2(2名)
 *2) 屋内・屋外の順に示す。無=移動補助具を使用せず 杖=杖を使用 シ=シルバーカー使用
 *3) 斜体は『無・杖』の人の旅行イメージを示す
 *4) A=『行きたい旅行が具体的にある』、B=『漠然とし浮かばない』、C=『無理に行きたいと思わない』
 *5) ○=バリアフリー旅行を知っていた、×=バリアフリー旅行を知らなかった
 *6) 網がけ=インタビュー中一貫して「旅行に行きたくない」と回答した者

- ①歩行に自信がない ②行動スピードについていけない ③体力がない、疲れやすい ④治療中
 ⑤連れて行ってくれる人がいない ⑥家族に心配をかけたくない
 ⑦移動法・速度の配慮 ⑧連れて行ってくれる人 ⑨一緒に行きたい人 ⑩家族の賛成 ⑪お金 ⑫行かなくていい

行動スピードへの配慮』を挙げた者は、B群の37.5%、C群の25%のみであり、「連れて行ってくれる人」「一緒に行きたい人」「家族の賛成」などの『人的支援』を挙げた者がB群の75%、C群の50%と多かった。『経済支援』

をあげたものはA群の1名のみであり、C群で『行かなくていい』と答えた者は50%であった。

5. バリアフリー旅行の認知度

バリアフリー旅行の認知度を26名全員に尋ねたとこ

表3:旅行に行かれない原因(複数回答あり)

	身体的要因					人的要因	経済的 要因
	歩行に自信が ない	行動スピード についていけ ない	体力がない、 疲れやすい	治療中			
A群(4名)	2名(50%)	1名(25%)	1名(25%)	1名(25%)	0名(0%)	2名(50%)	1名(25%)
B群(8名)	6名(75%)	5名(62.5%)	3名(37.5%)	0名(0%)	2名(25%)	4名(50%)	0名(0%)
C群(8名)	8名(100%)	4名(50%)	2名(25%)	4名(50%)	0名(0%)	1名(12.5%)	2名(25%)
合計(20名)	16名(80%)	10名(62.5%)	6名(37.5%)	5名(31.25%)	2名(12.5%)	7名(35%)	3名(15%)

表4:旅行に行かれるようになるために必要なこと
(複数回答あり)

	移動・スピー ドへの配慮	人的支援	経済的 支援	行かれな くていい
A群 (4名)	1名 (25%)	2名 (50%)	1名 (25%)	-
B群 (8名)	3名 (37.5%)	6名 (75%)	0名 (0%)	-
C群 (8名)	2名 (25%)	4名 (50%)	0名 (0%)	4名 (50%)
合計 (20名)	6名 (30%)	12名 (60%)	1名 (5%)	4名 (20%)

表5:バリアフリー旅行の認知度

		知っていた	知らなかった
旅行に行った人(6名)		1名(88歳)	5名(83.3%)
最近旅行に 行っていな い人(20名)	A群(4名)	0名	4名(100%)
	B群(8名)	2名(85,88歳)	6名(75%)
	C群(8名)	3名(74,83,83歳)	5名(62.5%)
合計26名		6名(23.1%)	20名(76.9%)

る、「知っていた」が6名(23.1%)、「知らなかった」が20名(76.9%)であった(表5)。知っていた人には後期高齢者が多かった。また、「旅行に行っている人」と「行きたい旅行のイメージを持っている人(A群)」はバリアフリー旅行の認知度が低かった。「バリアフリー旅行を知っていた」と答えた人にどのような経緯で知ったかを尋ねたところ、自宅に届いたチラシや旅行冊子で見た(4名)、旅仲間聞いた(1名)、不明(1名)であった。なお、バリアフリー旅行の参加経験者はいなかった。

6. バリアフリー旅行への参加意欲

『バリアフリー旅行に行きたいと思うか』を尋ねると、「行きたいけど行かれない」が18.2%、「行きたくない」が84.6%であった(表6)。バリアフリー旅行を「知っていた者」と「知らなかった者」の間で、旅行参加に対する意欲の差は見られず、「行かれない」あるいは「行きたくない」と思う理由にも違いはなかった。一方、「バリアフリー旅行に行きたくない」と考える者のうち5名が「同行者に迷惑をかけたくないから」と答え、「身体状況に自信がないから」と答えた3名も、インタビューの中で「何

表6:バリアフリー旅行に行きたいと思いますか

	理由
「行きたいけれど行かれない」(4名:18.2%) バリアフリー旅行を知っていた:1名 知らなかった:3名	足が悪いので本当に大丈夫か不安だから。 どうしたらいいのかわからないから。 一緒に行く仲間がいないから。 家族が心配するから。
「行きたくない」 (22名:84.6%) バリアフリー旅行を知っていた:5名 知らなかった:17名	同行者に迷惑をかけたくないから:5名 家族が心配するから:4名 身体状況に自信がないから:3名 団体行動が面倒だから:2名 代金が高いから:2名 家族に連れて行ってもらえるから:1名 不明(明確な回答なし):5名

かあった時に、人様に迷惑をおかけする訳にはいかない」という思いが語られた。

IV. 考察

1. “旅行に行った者”と“旅行に行っていない者”について

“旅行に行った者”と“旅行に行っていない者”の基礎情報を比較すると(表1, 2)ほとんど差はなく、「旅行に行かれるかどうか」は年齢や性別、介護度、身体状況、家族構成などで決まるものでないと考えられる。一方、“旅行に行った者”は、毎回同じ同行者に誘われ、同じ人と一緒に旅行へ行っていることが多く、同行者の存在が「旅行に行かれるか」に大きな影響を持っていると考えられる。

2. “行きたい旅行”について

「行きたい旅行」について(表2)、A群は希望する旅行が「クルーズ」や「海外旅行」など大規模で、旅行に行くタイミングを待っている群、B群は、「近場の温泉」や「2泊3日」など漠然とした旅行イメージしか持ってお

らず、具体的な計画が立てられない群と考えられた。C群は、あまり興味がなく無理してまで行きたくないと考えている人と、諦めてしまっているため行き先は浮かばないが、きっかけがあればB群やA群に変わる人々がいると推測された。また、B群が漠然とした旅行イメージしか持てない原因として、現在の高齢者は職場や老人会などの団体旅行経験者が多く、自分で旅行の計画を立て実行する方法がわからないことが考えられた。同時に、「最近旅行に行った人」の旅行内容と、B群のイメージした「行きたい旅行」は類似していることから、具体的に旅行をイメージできないB群は、かつて旅行した土地を中心に積極的に旅行の提案をしていけば、旅行支援の対象になるのではないかと考えられた。

外出時のみ杖を使う者の中に具体的な旅行イメージを持っている者がいなかったが、その要因として、『杖や車いすなどを使うのはみっともない』と思っている人が特に多かったことがあげられる。このことから、杖や“杖を使う自分”に対する内なる偏見や、“杖を使わないと歩けないような人は、旅行に行かれない”という誤解があるのではないかと考えられた。

3. 「旅行に行かれない原因」と「旅行に行かれるようになるために必要なこと」について

「旅行に行かれない原因(表3)」と「旅行に行かれるようになるために必要なこと(表4)」を比較すると、B群の75%、C群の100%が「旅行に行かれない原因」として「身体的理由」を挙げたにも関わらず、「旅行に行けるようになるために必要なこと」として『移動法や行動スピードへの配慮』を挙げた人は、B群の37.5%、C群の25%しかいなかった。一方、『連れて行ってくれる人』『一緒に行きたい人』『家族の賛成』などの人的な要因を挙げた者は、B群では50%から75%へ、C群では12.5%から50%へと増加していた。このことから、旅行に行かれない直接の原因に身体的要因を挙げていても、移動やスピード面への配慮だけでは旅行に行かれるようにはならず、人的な影響が大きいといえる。これは、身体に不安があるため単独で行動する自信のない者が、一緒に行ってくれる人を求めているともいえる。また、C群に体力不足をあげる人が多かったことから、歩行や行動スピードに加え体力に不安があると『無理に行きたくない』と思うようになるのではないかと考えられた。

4. バリアフリー旅行の認知度と旅行の可能性

バリアフリー旅行の存在を知っていた人は、23.1%しかいなかった(表5)。バリアフリー旅行の認知度については、今後、一般の人でも対象とした研究を行う必要があるが、何らかの障害があり援助の必要な高齢者に、旅行情報が

十分に伝わっているとはいえない。バリアフリー旅行は業界規模が小さく、お金のかかる新聞やマスメディアを使った宣伝が行えないため、積極的に行動できない高齢者や視力障害のある高齢者には特に伝わりにくいと思われる。また、『バリアフリー旅行に行きたいと思うか』を尋ねると、85%近くの人が「行きたくない」と答えていた(表6)。明確な理由が得られなかった5名を除く17名のうち、「同行者に迷惑をかけたくない」という思いが感じられた者が47%もいた。これは、現代の高齢者は幼いころから、「人様に迷惑をかけるようなことはしてはいけない。迷惑をかけるくらいならば我慢しなさい」と教えられ育っており、その信念がとて強いためだと考えられる。同時に、「(さっさと行動できず)若い人に冷たい視線を向けられ嫌だった」「自分も元気なころ、のろのろしている年寄りを見るとイライラしたから、そのように思われていると思う」などと語る者が多数いた。このことから、高齢者の多くは、“何らかの配慮が必要な自分は、人に迷惑をかける存在で、これ以上迷惑をかけずに生きていかななくてはならない”と思っていると考えられる。

一方、昔の旅行の話を始めたら、身を乗り出しながら帰りの時間も忘れて話し続ける人や、「いつも旅行番組を見ながら、空想の中で旅を楽しんでいるのよ」と話す人がおり、言葉に出したり自分から行動を起こしたりはしないけれど、心の中では“旅行に行けたらいいな”という純粋な気持ちをもっている人がたくさんいると考えられる。これらの人に対し、旅行という道具を使って、旅行に行くという目標の下、身体機能面、心理面、家族関係などへ包括的なアプローチを行っていかば、“自分は迷惑だ”という誤った自己認識を変化させていくことができるのではないかと考えられた。

5. バリアフリー旅行への提言

今回の調査では、バリアフリー旅行を知っていた50~70歳代は1名しかおらず、旅行社の調査で得た、『バリアフリー旅行の参加者は障害を持った50~70歳代が中心である』という情報と違いが見られた。これは、バリアフリー旅行に行かれるはずでありながらバリアフリー旅行の情報を知らず、チャンスを失っている者がいる可能性を示している。この層を上手に取り込むことができれば、バリアフリー旅行業界の、“新規参加者の獲得が難しく市場規模が拡大しない”という課題を解くことができるのではないかと考えた。そこで、“旅行に行きたいが、もう行かれない”と思い込んでいる高齢者や障害者に、『あなた達のための旅行がある』ということを知ってもらい、行きたい旅行を見つけ、行動を起こしてもらうために、以下の3つの提案をしたい。

1) 医療・福祉施設を利用し、本人へ情報を発信する

障害を持った高齢者の多くは医療・福祉機関に定期的に通っていることを考え、待合室など人の集まる場所にポスターやパンフレットを用意し、バリアフリー旅行の認知度を高める。定期的に新しい旅行情報を提供する事ができれば、行かれない人に旅行を疑似体験してもらえ、施設スタッフへの情報提供にもなるかも知れない。

2) “バリアフリー家族旅行”を企画し、子世代・孫世代へ情報を発信する

バリアフリー旅行を知った経緯を質問すると半数の者が、「子や孫宛に送られてきたチラシや冊子で見た」と回答していた(表 1, 2)。また、子や孫と旅行に行っているものが多く、子や孫に連れて行ってもらうことを求めている人も多かった。従って、家族が高齢者・障害者を“気軽に安全に”旅行に連れて行ってあげられる手段として、“バリアフリー家族旅行”を企画し、子世代・孫世代に情報発信していくとよいと考える。家族で楽しめる旅行であれば、“高齢者や障害者本人が、日ごろの感謝を込めて家族を招待する”といった申し込みパターンも期待できるかも知れない。

3) 施設等に出向き、希望者に直接旅行の提案・支援を行う

今回の調査で、『身体に不安があり単独で行動する自信のない者は、一緒に行ってくれる人を求めていた』ことから、デイサービス施設などで旅行の提案・支援ができるようなシステムを提案したい。現在、老人デイサービス(通所介護施設)は、全国に14,737施設⁶⁾、都内に1171施設⁷⁾あり、そこには“配慮があれば外出できる高齢者”がたくさん集まっていると考えられる。インタビュー中も、バリアフリー旅行の冊子を見ながら、「あなたが行くなら、私も行くわ!」と誘い合ったり、「ここ(デイサービス)で連れていってくれたら、みんなの分のお金、出してもいいわよ」と得意げに話す人がいたりして、大いに盛り上がった。“旅行”はデイサービス本来の目的ではないため、デイサービスに旅行支援を期待することはできないが、旅行の企画・実行を本業とする旅行業界が旅行支援を希望する利用者のいる施設に出向き、利用者と旅行社で個人契約を結び旅行を行うことならば可能なのではないかと考えた。施設内の仲間(一緒に行きたい人)が身近にあり、事前に身体的な不安を相談し、困ったときに助けを求められる同行者(旅行社のスタッフ)を確認できれば、旅行に行かれない要因の多くが解消される。バリアフリー旅行のリピーター率がとても高いことから、一人でもその施設からバリアフリー旅行に参加した者が出て、楽しかった思い出を語れば、その後仲間を誘って参加する人が増えていくだろうと考えられる。

V. 最後に

本研究は1ヶ所の通所介護施設で行ったインタビュー調査の結果に基づいており、他の施設でも同様の結果が得られるかはわからず、今後、更なる検討が必要である。

旅行支援において、医療・福祉職は、直接的支援だけでなく、“旅行に行きたい”という希望を“旅行を企画・実行するプロ”へ橋渡しするという重要な役目を担う。作業療法士はQOLを高める手段として旅行を捉え、対象者が自信を持って生き生きとした生活を送れるように、積極的に旅行を支援できるのではないだろうか。

VI. 謝辞

本研究を進めるにあたり、貴重な時間を割いてバリアフリー旅行についてお話をくださった、(株)クラブツーリズム・バリアフリー旅行センター、(株)JTBB バリアフリープラザの関係者の方々、快くインタビュー調査にご協力いただいた通所介護老人デイサービスセンター「ガーデン・ほんむら」の皆様感謝いたします。また、ご多忙の中、方向性を示し、強く温かくご指導くださいました山田孝教授に感謝いたします。

VII. 文献

- 1) 岡本 強, 時松清, 前川利雄, 伊福明, 本田明広: 外来片麻痺患者の旅行に関する調査. 理学療法学 21 (Suppl.): 310, 1994.
- 2) 赤沢麻美, 岩本俊彦, 今田薫郎, 宮崎香里, 宮路裕子他: 海外旅行に対する高齢者の意識調査成績. Geriatric medicine 42: 1675-1679, 2004.
- 3) 高橋 誠: 障害と旅 車いすで旅を楽しむ. 作業療法ジャーナル 39: 396-399, 2005.
- 4) クラブツーリズム(株): 【在宅ケアの新たなパートナー 多様化の進むケアの選択】旅をあきらめない、夢をあきらめない車いすで行けるツアーを企画・主催. コミュニティケア 71: 56-57, 2005.
- 5) 浅海奈津子: 旅行する 障害者高齢者の旅行支援とまちづくり. 作業療法ジャーナル 35: 555-561, 2001.
- 6) 厚生労働省ホームページ
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/kaigo04/gaiyo.html>
- 7) 東京都介護サービス情報ホームページ
<http://www.kaigohoken.metro.tokyo.jp/rakuraku/1/1.asp>

倶楽部ツーリズム

伴流 高志 様

拝啓

寒さ厳しき折、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。突然のお手紙、お許しください。

9月下旬に、卒業研究の調査で、バリアフリー旅行についてお話を聞かせていただきました、東京都立保健科学大学作業療法学科4年の石橋綾です。その節は、お忙しい中、貴重なお話をたくさん聞かせていただき、本当にどうもありがとうございました。

先日、卒業研究論文が完成し、無事受理されました。その研究論文を送付させていただきます。内容や文章は拙いものですが、お時間がありましたらご一読いただくと大変嬉しく思います。また、ご意見、ご感想等をいただけましたらなお嬉しいです。

今回の研究では、伴流様にさせていただいたお話からヒントをいただき、『高齢者の旅行意識とバリアフリー旅行の可能性』というテーマで、高齢者通所施設におけるインタビュー調査を行いました。インタビュー調査の中で、“旅行”が人に与える“希望”や“自信”という優れた効果を改めて実感し、旅行支援の重要性を強く感じました。

また、研究発表を通し、「バリアフリー旅行の存在を始めて知った」、「(自分も就職先で旅行支援を行いたい)」との意見を持ってくれた同輩が多数おり、より活気ある生活への支援の一環として、“旅行”の積極的な提案が少しでも多く行われるようになればよいと大変嬉しくおもいました。

作業療法士として、“旅行参加自信付けにつながる援助”については、今回は触れることはできませんでしたが、今後も意識して考えていきたいと思っています。

貴重な、ご助言をいただき、本当にどうもありがとうございました。

これから、もうしばらくの間寒い日々が続くことと思います。どうぞお元気で活躍ください。

敬具

追伸：先のお話の中で、“クラブツーリズムのバリアフリー旅行に関わる文献があったら知りたい”とお話があったように思いましたので、そちらの方も同封させていただきます。医中誌 Web という医療系の検索上で見つけたもののみなので、一部とは思いますが、お役に立つことができれば幸いです。

平成 18 年 1 月 12 日
東京都立保健科学大学作業療法学科 4 年
石橋 綾